

はばたき

No.21

1987.3

神戸市立王子動物園

記録のすすめ

「記録」①後々まで伝える必要のある事柄を書きしるすこと。その書きしるしたのもの。②競技などの成績・結果。特にその最高のもの。と辞典などは定義している。

現在人類は、宇宙を飛び、衛星中継テレビでは、地球の裏側の映像を即座に茶の間で見ることが出来る時代になった。

科学技術の発達は、決して一朝一夕にここまでなったものではなく、幾多の試行錯誤の繰返しを重ねて少しずつデータを蓄積して来た成果であり、そのためには大勢の人々の英知と長い時間を費して到達したもので、更に新たな出発点として未来に向けて瞬時も休みなく進んでいるのである。

われわれは動物飼育に携っており、宇宙工学や電子技術の究明とは異なる分野であるが、永い年月の間に培った経験と絶えざる研究が不可欠なのは、どの分野においても同じであり、その積み重ねによって今日の動物園が成り立っているのである。

記録の積み重ねの中から新しい発見があり、技術の進歩が生み出されるもので、日々の記録が生きて来るのである。

動物科学資料館の書庫に収蔵されている飼育日誌も貴重な資料として永久に保存されるものである。

また、記録の中には風変りなものもある。

学生時代の友人A君は、週に2回欠かさず映画館通いを卒業までの4年間続けた。その映画1本1本の題名、監督、主演俳優、はもちろん、1行の批評と自分独自の評点を大学ノート3冊にギッシリと書込んでいた。卒業時には自分の大切な財産だと大喜びであった。3本立洋画を学割料金で安く見るのが唯一の娯楽であった時代の話である。もちろん、本業の学業成績も優秀なA君は大企業に就職して新たな人生へと巣立って行った。

趣味・娯楽の中からでも、たゆまない蓄積によって貴重な記録が生まれる。たとえ世の中に役立つものではないが、彼にとっては青春の思い出の数百頁であり、戦後の一時期の映画史とも評価されるものである。

写真好きの一青年に初めて娘さんが誕生した。彼は産院にいる間から毎日1コマずつ写真を撮り続け、遂に花嫁姿にまで成長した娘さんの写真を

記念アルバムに収めて嫁ぎ行く娘に贈った。という話があった。

約7,300枚以上の写真である。毎日一緒に生活していたのでは成長する様が分らないが、連日撮影したのを見ると、初詣、初誕生、七五三、小学校入学と成長の跡が歴然と記録されており、この娘さんにとっては人生前半の自分の歴史が何の飾りもなくありのままの姿で再現される、何と素晴らしいアルバムである。ただ、一日も欠かさず撮り続けた親の根気と愛情には頭の下る思いがする。

毎日少しずつの記録を忍耐強く継続してゆくことが、偉大な発見や立派な業績につながる。

野生動物と接しているわれわれも目の前の貴重な資料を慢然と見逃すことなく最大限に活用するために、あらゆる記録を蓄積してゆきたいものである。

神戸市立王子動物園長 福岡 順三

もくじ

◆記録のすすめ	2
◆すばらしい動物たちの世界	3
◆動物育児日記	
●ベニガオザルの人工保育	6
●新しい仲間の紹介	7
◆新しい仲間	8
◆かわいい親子	9
◆飼育うらばなし	
●にわとりはどどこだ！	10
●鳥の性別を見分ける	11
◆動物なぜなぜ問答	
●ヘビのぬげがら	12
●カンガルーにはなんで袋があるんやろ？	12
◆姉妹都市リガ市動物園にリスザルを贈呈！	13
◆トピックス	14
◆うら表紙	
●うさぎ年版画コンクール特別賞入賞作品	

表紙写真 ペンギン舎

(撮影 福田元二)

すばらしい動物たちの世界

動物科学資料館完成



王子動物園では、昭和59年度から建設を進めておりました動物科学資料館がこのほど完成し、3月21日にオープンすることになりました。この資料館は動物の知識と理解を深め、ひいては自然の尊さを学ぶ新しい施設で、各方面から期待されています。

では、動物科学資料館のあらましを紹介しましょう。

§ テーマは「生きる」

地球上に住む動物は住んでいる場所の自然に従いながら力強く生きています。動物の生き方はさまざまですが、自然をうまく利用し、頭を働かせながら生き続け、子孫をふやすことに努力しています。動物は生きていくために環境に合った体の仕組みや機能、習性を備えています。そのすばらしさは驚くばかりです。そこで、この動物科学資料館のテーマに「生きる」を選び、動物たちの生活ぶりを楽しく学んで頂くことにしました。

§ 大きな動物世界地図が迎えます

動物科学資料館は園内遊園地の北側にあり、前には広い芝生広場があります。資料館にはこの広場からガラスのトンネルを通過して入ります。入ったところはエントランスホールで壁面にかかけられた巨大な世界地図に迎えられます。この地図をよく見ると、陸地の部分がすべて動物を形取った木のモザイクでできており、世界各地に住む野生動物が歓迎のあいさつをしている

ように見えます。この動物世界地図で「動物探し」を楽しんでください。

§ あつノゴリラがウイング動物世界地図を見て右へ進むと、そこは展示室の入口、北極



▲入口

から南極まで動物の住む10カ所の場所を美しいカラー写真で見ながら進むと、大木の茂る森に出くわします。この森はアフリカの赤道直下にあるビルンガ死火山帯のふもとで、ハゲニアという巨木のもとで巣を作り暮らしている2頭のマウンテンゴリラと対面します。目を動かし、首を振り、口元を動かしている姿は「亡びかけている私たちを守って！」と訴えているように見えます。このゴリラの森はすべて模型ですが、実物とそっくりで、バックの絵やサウンドと共に、いかにもアフリカの奥地に居るような錯覚を起こします。

§ 見て、聞いて、だしがめて

ゴリラの森を中心に展示室が囲んでいます。「生きる」をテーマに、動物の暮らし、体の構造、機能、習性などを模型、実物標本、映像、音響などで立体的に分かりやすく展示しています。



▲ゴリラの森

その中から代表的な展示物をいくつかひろって紹介しましょう。

◆サバンナに生きる

サバンナで生活する動物たちをミニジオラマとナレーションで紹介しています。

◆冬をすごす

動物の冬のすごし方はさまざまです。日本の北陸山岳地帯に住む野生動物のすごし方を実物大の模型で再現しています。

◆食性にあつた頭骨

動物の頭骨は食物によって違います。その違いを実物標本とハーフミラーを使って知る展示物です。

◆食性にあつた口

鳥の口ばしはその機能によって形が違います。ここでは8種の鳥のくちばしを人間が使う道具にたとえ、その口ばしの役目を紹介します。

◆アニマルレストラン

動物たちの毎日食べているエサを実物そっくりの模型で展示し、動物たちの食事風景をディスク映像で見せ、最後は動物がどんなフンをするかをオートスライドで紹介します。

◆動物の群れ

動物は身を守るためにいろいろな行動をしますが群を作るのもその一つの方法です。ここではいろいろな動物の群をオートスライドとナレーションで紹介し、さらに群が通る時の地響きを体験できる装置をつけ、臨場感を盛り上げます。

◆巣のいろいろ

動物や鳥たちは子孫をふやすために安全な場所に巣を作ります。ここでは日ごろあまり見ることのできない鳥やビーバーの巣を模型と実物で紹介します。

◆動物のからだ

草食獣と肉食獣の骨格の違いを骨格の実物を使って展示しています。この骨格のほとんどは王子動物園で死亡した動物で、キリンの長男、カバの出目男も含まれています。さらに壁面には実物大の動物線画が描かれ、人と大きさ比べもできます。

◆アニマルアイズタワー

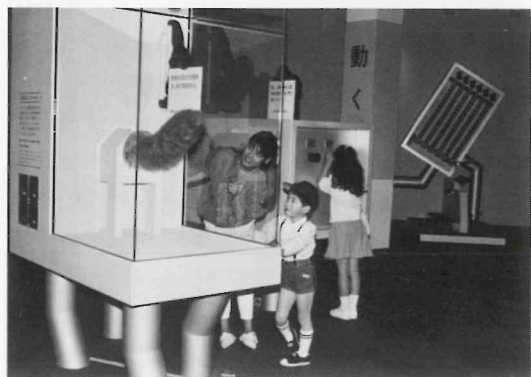
動物の目から見た世界をテレビカメラを使って見る装置で、選択によりキリン、ライオン、カメから見る館内風景が見られます。

◆コミュニケーション

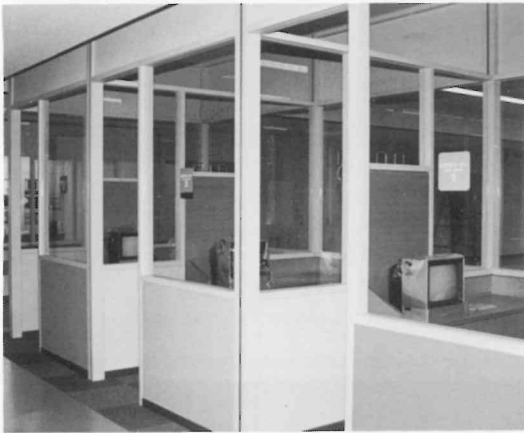
動物は感情をどのように表わすでしょうか。ここではオオカミのシッポで感情の様子を紹介します。



▲展示物 1



▲展示物 2



▲ビデオコーナー

◆アニマルレース

自転車のペダルをこいでチーターやキリン、シマウマ、ライオン、ゾウとスピード比べをする装置です。ちょう戦してみてください。

◆エコロジーバランス

動物を含めて自然界はバランスが保たれています。このバランスが少しでも傾むくと私たち人間の生活にも影響がでます。無計画な開発や乱獲によってこのバランスが崩れようとしています。これをモニュメントで表わし自然保護の大切さを訴えます。

以上は展示物の主なものですが、その他にも多くの展示物があり、楽しみながら動物の知識を学ぶことができます。

§ 楽しい催しの特別展示室

常設展示室の隣には特別展示室があります。ここは1～3カ月毎に動物や自然を扱った特別の企画や催し物を行います。又この特別展示室の一角には常設のはく製展示コーナーがあり、かつて王子動物園で飼育されていた動物のはく製や骨格を陳列しています。

§ くわしく知りたい人は学習コーナーで

動物のことを更に勉強したい人たちのために学習コーナーがあります。動物や自然に関する図書資料を集め、入館者の人たちに利用できる図書閲覧室、幼児やこどもが自由に絵本や図鑑を見られることも図書室、さらに、希望のビデオ番組が見られるビデオコーナーが3カ所あり、共に動物の勉強や知識の向上に役立つことでしょう。



▲休けいホール

§ 動物の水中生態を見ながらちよつと一服

エントランスホールの左側には大きな休けいホールがあります。このホールの一面はガラス張りでその外側で飼育されているペンギン・カワウソが見られます。水中でエサを食べるペンギンの群や水中でたわむれる2頭のカワウソのかわいい姿を目の前で見ながら休けいできるホールです。そのほか、動物の映像が見られるマルチビジョンやスタンプコーナー、売店などがあり、憩いの場所として大いに活用されるでしょう。

§ 港と異人館が見える屋上庭園

動物科学資料館の屋上は庭園で、ここからの眺めは最高です。南は神戸港を望み、晴れた日には紀伊半島まで遠望ができ、北は六甲摩耶連山をバックに異人館「旧ハンター邸」が目前にせまるなど眺望は抜群です。若い人たちの話りの場として、スケッチや写真撮影の最高の場所になることでしょう。

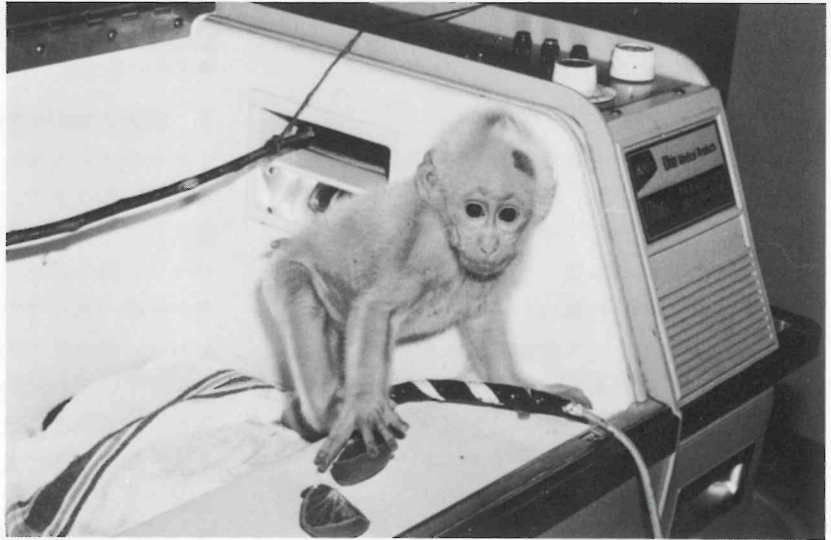
3月には動物たちも繁殖のシーズンに入ります。あちらこちらでベビー誕生のニュースも聞かれ、この動物科学資料館のオープンも加わりますますにぎわうことでしょう。今年には神戸港開港120周年の年に当り、この記念すべき年に動物科学資料館が完成したことは大いに意義があることで、神戸の自慢の一つにつけ加えることができるのではないのでしょうか。

(谷岡正之)

動物育児日記

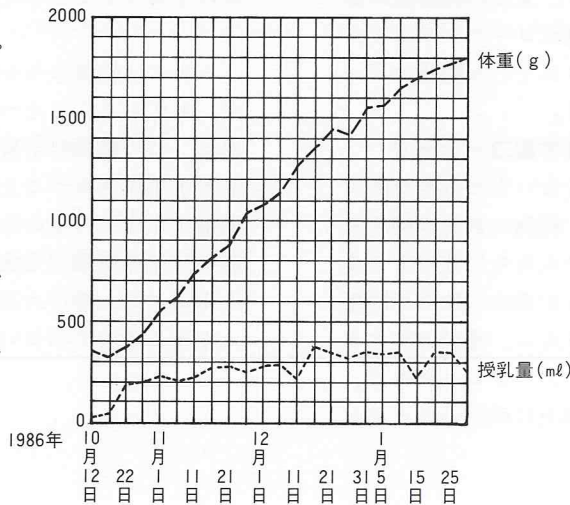
◆ベニガオザルの人工保育

昨年10月12日、ベニガオザルの赤ちゃんが帝王切開で生まれました。赤ちゃんは仮死状態であったため、私は心配でゆすったり、ヘアードライヤーでぬれた体を、乾燥し暖めたりしました。今回も去年に続いて死産かと諦らめていたとき、うす目を開けて、小さな胸が動きだしました。体重は370gと通常の出産より小さく未熟でした。秋に生まれたのでモミジ(紅葉)という名前をつけました。



人間用の保育器に入って可愛い顔をして、寝ている姿を見ると、一つの生命が生まれる、世の不思議というものを感じます。母親のフジも麻酔から覚めるとキョトンとしながらも餌を食べだしました。人間でいう母子共に健在というところでしょうか、まずは一安心です。しかしこれからがたいへんです。保育器の温度は35℃。成長に従って28℃、そして25℃と下げていきました。それに出産当初は2時間ごとに人間用の粉ミルクを与えなければなりません。僅か5mlとか、15mlと少量飲むのをその都度、哺乳ピンを殺菌し、適温にして与えます。すぐに沢山飲んでくれれば楽なのですが、飲みすぎるともどしてしまうこと

があります。午前6時、8時、10時、午後12時、2時、4時、そして夜の10時と平常業務の外に母親業が始まるわけです。新聞などで、赤ちゃん誕生と発表されるとうれしさを感じますが、その後も元気で育ってくれるだろうか、心配がつきません。



生後20日するとき動物園の実習生がモミジにミルクを与えたのですが、あまり飲まずに困っていたことでした。たまたま、居合せた婦人がモミジを抱いて背中をさすってやったところ、モミジがゲップをしてそのあとミルクを良く飲みだしました。婦人は自分の子供を育てたときのことを思い出して、ためしてみたのです。婦人の、目は

やさしくわが子を見るようでした。年末も正月も夜も休まれません。飼育第2班6名で交代の母さん役です。今日は誰かな？と、モミジは待っています。ミルクを飲まず腹のへこみ具合を思うと家にもいじっとしてられません。飲み終わると、大きくふくらんだお腹になります。与える時間は、正確にしていますので、時間がくるとキーンキーンと鳴きだします。生後2ヶ月頃には哺乳も馴れ120mlのミルクを1分程度で飲んでしまい、すぐ保育器から出て、遊び廻るようになりました。しかし、この様な行動力はすぐに身についたわけではありません。保育器の外の風景や物などをそっと手でさわら

せるようにしました。モミジはこわごわに口でなめたり手、足などでさわることによって、段々と、なれて自分から保育器の外へ自由に走り廻るようになったのです。

又、人に対しても日頃見なれた人達には、愛嬌をふりまくのですが、知らない人が来ると、口をとんがらして、ウーウと一人前に威嚇し、人見しりするようになりました。私に跳びついたりします。だっこなどをして散歩したりして遊びますが、あまり人に馴れると、このあと仲間に戻るのが大変です。しかし、モミジは美人です(担当者のひいきめでしょうか)きっと仲間たちにも受け入れられることと思います。

(三角勝利)

新しい仲間の紹介

◆ナマケモノはナマケモノだー。

フタユビナマケモノは、ベネズエラ、ギアナ、ブラジル北部の森林に住んでいます。体長は五十～六十センチで、前肢のつめは2つで後肢のつめは3つあります。歯は上あごに10本、下あごに8本あります。樹上に住み動作が異常にのろく、毛深いのが特徴です。日常は樹木の枝にぶら下がって暮らしています。野性でのエサはセクロピアの木の実、葉、芽です。一本の木にある食べ物を食べつくすと、初めて木を離れますが、地上におりて移ることはなく木から木へ四肢を使って移るのです。地上では無力で立ったり歩いたりするのは困難ですが、水泳はなかなか上手だそうです。夜行性で日中は四肢を使って木にぶら下り眠っています。当園では、太陽の動物舎の出口附近にフタユビナマケモノ舎を作りました。エサはバナナ、リンゴ、カキ、南京、人参、トマトなどを与えています。なかでも好物は南京、カキで、よく食べます。ナマケモノは嗅覚が発達しているのでこのような好物も嗅いでかぎわけているようです。鉄柵や木にぶら下がっているので、針金にエサをぶら下げてやるのです。このようにぶら下げられたエサをナマケモノはぶら下ったまま前肢でエサを引

き寄せて食べています。手で握ることができないのでエサを食べたあとは赤ちゃんのように口のみわりをよごしています。ぶら下げたエサをながめていると、まるで洗濯をしたくつ下をぶら下げているようです。日常は丸くなって眠っているのも死んでいるかの様にピクリとも動きません。このような動きのないナマケモノの健康状態は毎日エサを釣ってやる時に体を触ることでわかります。このときに目を覚し、大きな口を開けて怒るのです。可愛い目をして前肢のカギ爪で攻撃してきます。その時に初めて元気であるな——ということが、わかるのです。ナマケモノは寒さに弱いので冬場は室温を22℃～24℃位に保っています。一週間に一度程度、地上で糞をするのですが、私はまだ一度も見たことがありません。どうも夜中に便をしている様です。この事からもナマケモノは夜行性であることがわかります。月に一度、動物の夜間調査をする時にナマケモノ舎を観察すると、よく活動しております。日中はあまり活動しないのに実際に睡眠時間を計った事はありませんが、野性では18時間も眠るそうです。本当にナマケモノは 怠け者だ——。

(中岡正利)

新しい仲間



▲ナマケモノ (昭和61年10月1日来園)

▼クロエリハクチョウ (昭和61年9月1日来園)



◀ナマケグマ (昭和61年9月1日来園)



◀カンガルー

(撮影
福田元二・岸田一也)

(昭和61年12月16日袋から出る)

かわいい親子



▲ヒマラヤグマ
(昭和61年2月7日生まれ)

◀ツルツル(園長先生)のツルツル(園長先生)



飼育うらばなし

◆にわとりは どこだ！

〔おしゃべりインコ〕

当園に入園されると正面東側にインコ舎があり、にぎやかに時には耳ざわりなほどに鳴きさけびながら皆さんの相手をしてくれます。インコは、ものまねをするのとしぐさがかわいいで、鳥の仲間では、人気者の第一人者です。

このインコ舎に飼われているインコは、1番大型で尾羽の先までいれると1メートル近くあるスマレコンゴウインコから、セキセイインコまで飼っています。インコと言えば、すぐ言葉のものまねが出来る事を連想しますが、通称オームと呼ばれている全身が白い羽色をしたオオバタン、コバタン、キバタン等が、よく言葉を感じます。本園のコバタンも、「オハヨウ、コンニチワ」と愛想よく喋っていますし時には半分やけ気味に大きな声で「コンニチワ」の連発です。スマレコンゴウインコも、掃除をしている時などすぐ目の前にきて首をかしげて「ナニー、ナニー、」と愛嬌をふりまいてくれます。

ところで、私はキバタンにももの見事に騙されました。4～5年前の事です。まだ旧インコ

舎の時、いつもの様に掃除をしていると突然「ッコーコ、コッココー」とにわとりによく似た声が出た様に思ったのですが、そのまま掃除をしていると再び同じ声が聞こえてきます。まさしくにわたりの鳴声です。まただれかが園外から、にわとりを家庭で飼えなくなったので夜の間に捨てたなと思いつつ掃除を続けていました。今までも朝インコ舎に行くのにわとりがうろついている事があったのです。掃除を終えてにわとりを捕えなくてはとさがすのですが姿が見あたりません。しばらくさがしているとまたしても、にわたりの鳴声です。声はすれど姿見えません。姿が見えないはずですが。何とキバタンが鳴っていたのです。今まで人の言葉はよく喋っていたのですが、にわたりのものまねは初めて聞いたのももの見事にだまされたのでした。捨てられたにわとりがインコ舎の囲りをうろついている間にいつの間にか覚えてしまったのです。今でも時々わたりの鳴声をまねている時がありますので聞けるかもしれません。

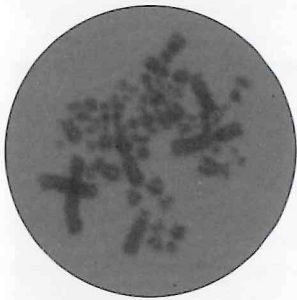
インコの中には、特に教えなくても自然に覚える個体がいるのです。その反対にいくら教えても一向にじょうずにならない個体もいます。いい個体になると、喋りだすと次から次へと覚え、長い歌でもじょうずにしかもはっきりと歌う個体もいます。インコの中にも、頭の良さ悪しがある様です。インコは多くの種類がありますが大半の種類が喋る可能性を持っています。セキセイでも、じょうずに喋るものもいます。家に飼っているセキセイも、根気よく教えれば喋るかも、ただし頭の良い個体がいればね！

当園のインコも喋る個体が多くいますので、インコとお話しをする時は、あまり悪い言葉を教えない様にして下さい。

(吉竹 渡)



◆鳥の性別を見分ける



◀タンチョウの
染色体

動物の性鑑別は、動物園の飼育下で繁殖をすすめていく上で大切な仕事のひとつです。鳥の場合、雄の立派なかざり羽のあるオシドリやクジャクのような種類は別として、ひと目で性別の見分けがつくものは意外と少ないのです。たとえばフラミンゴやハクチョウ、ツルの仲間などでは体の大きさに多少の違いはあっても、外見ではほとんど区別が付きません。

以前仲の良いコウノトリの夫婦が動物園において、巣作りも共同で行っていたためヒナの誕生がかなり期待されたことがあったそうです。でも長い間コウノトリ夫婦が交代で巣に座っても、いっこうに産卵が見られないのです。何年間かそういう状態が続いた後、2羽とも病気や事故で死亡してしまったのですが、解剖検査の結果夫婦が雌同志であったことがわかりました。おかしな話ですが動物園ではよく見られる実例です。

このようなことが繁殖の障害になる場合があるため、初めに言ったようにまず性鑑別が必要になってくるのです。

さて、鳥類の性鑑別には色々な方法があります。ハクチョウなどの仲間では、総排泄口を反転して生殖突起の有無を確認することで判定が可能です。血液や皮膚細胞を採取して培養の後、染色体検査で鑑別する方法は現在よく行われています(写真)。また針状の内視鏡で腹腔内の生殖器を直接見る方法もありますが、これらはいずれも鳥の捕獲や保定、麻酔といった鳥にとってはかなりのストレスになる作業が必要です。また、捕獲による事故の危険性もあります。

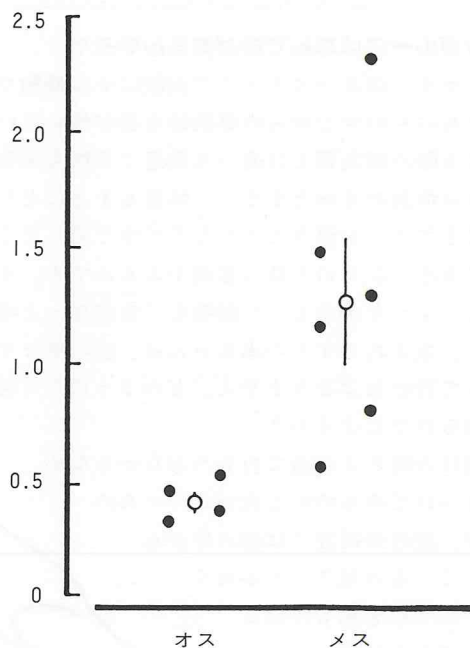
そこで、なんとか間接的に鳥に手を触れずに性別を判定できないか、ということで考えられたのが糞尿中の性ホルモン分析法なのです。アメリカで開発されたこの方法は、すでに何種類かの鳥で試みられ、その有効性が確かめられて

いますが、分析に特殊な施設と装置がいるためあまり普及していません。今回王子動物園では、繁殖にとりわけ力を入れているタンチョウを用いて、この方法による性鑑別を試みてみました。動物舎内に落ちていた糞尿を採取して、いくつかの操作を加えたのち、ラジオイムノアッセイ(放射免疫測定法)でテストステロン(男性ホルモン)とエストロジェン(女性ホルモン)の値を計測し、その比から性別を推定するのです。すでに染色体検査で性別がわかっている個体で調べたところでは、確かにホルモン値には雌雄で違いが現われていました(図1)。

この他にも、間接的に性別を知る方法がいくつか考えられます。鳥同志ではお互いに見分けがついているのですから、鳥の目や耳や鼻のかわりになるものを見つければよいはずですが。たとえば雌雄の鳴き声の違いの分析であるとか、特殊な波長の光線を当てて姿を見るとか、動物から発する微量な臭いを分析するとか、色々と考えられます。

動物に障害を与えないで性別を判定することのできるより有効な方法を開発してゆく研究は、これからも動物園の大切な仕事のひとつになってゆくでしょう。(村田浩一)

エストロジェン(女性ホルモン)値 / テストステロン値(男性ホルモン)



タンチョウの糞尿中性ホルモン比の雌雄差

— 動物 なぜ なぜ 問答 —

●ヘビのぬげがらを見たことがあります。どのようにして皮をぬぐのでしょうか。

ヘビもエビやカニのように皮をぬぎながら成長しますが、それを“脱皮”といいます。

大きなニシキヘビは一年に5～6回も脱皮をしますよ。餌（ニワトリ、ウサギなど）をよく食べ、元気だったタمامシ色のヘビが、急に色やツヤが悪くなり、目も白くなってきました。「あれ、病気かな？」

いや、病気じゃありませんよ、皮が古くなってきたので脱皮の前ぶれです。

「あっ、ぬぎました！」

ゆっくりと音もなく動き出したのは朝早くです。

ニシキヘビは倒木のU字型になった枝の間をゆっくり、ゆっくり通りぬけ出したのです。

薄い皮をやぶらないように、ほんとに用心深く皮をぬぎながら、前に進んでいました。1時間もかかるのかと思えば、わずか5分位で尾の先まできれいにぬけました。

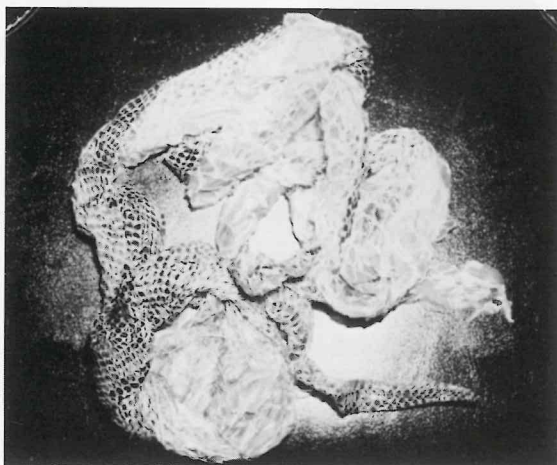
「あっ、やっぱり、皮がひっくり返ってる！」

私は感激しました。U字の枝にひっかかった皮が、まるでクツ下をぬいだようにくるりとひっくり返っているのです。

なるほど、脱皮したヘビの皮は裏返しになっているのは本当だったのです。

こうして、目も体もピカリ！とタمامシ色に光ったニシキヘビは再び生きた餌を食べはじめました。

(亀井一成)



●カンガルーにはなんで袋があるんやろ？

カンガルーはオーストラリア大陸にすむ動物です。この国は遠いむかしに他の大陸から離れたため、動物たちにもむかしからの原始的な姿が残っています。たとえば母体内で子供を育てる器官である胎盤タイバンは他の大陸の哺乳類とは違い未発達で子供も未熟児ミジュクジで生まれてきます。カンガルー

の子供は体長が2cmと小さく、体重も1gほどしかありません。ですから生まれてきても、お母さんのおなかの中と同じような場所で、もう少し長くいて大きくなるのを待つ必要があるのです。それが袋の中なのです。このような袋をもった動物を「有袋類ユウブイ」と呼んでいます。

さて、生まれてすぐの赤ちゃんは、袋の中まで自分の力ではって行かねばなりません。どのようにして袋の入口を知るのでしょうか？

以前はお母さんが舌で自分のおなかをなめて道をつけてやるのだと言われていたのですが、最近の研究では袋の中からお母さんのかおりカオリで袋のありかを知るのだとわかってきました。

(村田浩一)



姉妹都市リガ市動物園にリスザルを贈呈!

リガ市を訪問して

ソ連、ラトビア共和国 リガ市とは昭和49年6月18日に姉妹都市提携が結ばれて文化、市民交流など広く友好関係が続けられています。

動物交流も市民の親善を深めるための行事として始まりました。第1回目はリガ市柔道団が昭和55年11月に来神のときに、ヨーロッパビバー“2番、”がやって来まして、その返礼として神戸市選抜柔道団が昭和57年8月にリガ市を訪問する際にニホンザル“2番、”を贈っています。第2回目は昭和61年5月にヨーロッパカワウソ“1番、”がリガ市科学技術団来神の際に贈られて来ました。このカワウソは市民の皆様にも付け親となつていただき、ユウ君(勇)、コウチャン(幸)と呼ばれ、動物科学資料館併設のガラス張り水槽の獣舎で元気に暮しています。

このカワウソの返礼として、コモンリスザル10頭(雄4、雌6)を贈ることになり、昨年7月31日に動物園として初めてリガ市を訪問しました。

ラトビアのリガ市はバルト海の真珠と呼ばれる美しい海岸都市で、工業、漁業も盛んで、文化の香りも高いソ連での観光都市でもあります。環境はちょうど神戸の舞子海岸と信州の軽井沢とを一緒にしたようなリゾート地があり、古いヨーロッパの街並を持っていますので、一夏にリガ市の人口より多い100万人もの観光客が夏を楽しむためにやって来ます。

私達が訪問した季節は白夜の夏で、真夜中の12時でもまだ夕日が落ちず、海岸の砂浜で楽しんでいる人々で一パイでした。

動物贈呈式は樹木の多い動物園入口で副市長(女性)の来席でカンソながら親しみ深い雰囲気の中で行われました。その後リスザル舎をはじめ、園内見学をしました。森林公園といったたたづまいの中を馬車にゆられての散歩をしました。動物園の歴史は古く、74年前に開園されており、面積は16.5haと王子の2倍ちょっとの広さで、動物は400種、3000点(小さな水族館を含む)が展示されています。

ここは冬の寒さが厳しいため(-30℃)、猿類の飼育が困難とのこと、そのかわり、ユキヒョウ、シベリアトラ、ジャコウジカ、キアン(アジアノロバ)、オオツノヒツジなど日本では見られないロシア大陸に住む動物が多く、動物園関係者なら大喜びしそうな動物が飼育されています。猿類の展示は少なく、神戸から贈ったニ



ホンザル、リスザルはソ連の動物園でも大変めずらしいとのこと、来園の市民も大喜びの様子でした。

数年前までキリンも飼育されていたのですが、-40℃の厳寒のあった年に寒さのために死亡してしまったとのこと、私達、神戸の冬しか知らない者にとってはリガ動物園の動物飼育の困難さはこの事例で痛感したのです。このため、リスザルは暖房設備の完備しているは虫類、インコ舎に入れられ、大切に飼育されることになっていました。

リガ動物園の園長は若い美しい女性ですし、動物園技術者との動物飼育技術交流会の席でも女性が2/3をしめているなど働く婦人の多さに目をみはらせられました。この後、レニングラード、モスクワ動物園をも見学しましたが、スタッフとの懇談会の席ではほとんど女性で、活発に仕事に取りくんでいる姿をすばらしく思えたものです。

もう一つ、野生動物を大変大切にしている国民性を知らされたことをお伝えしましょう。

ラトビア野生動植物のレッドデータブック(稀少野生動植物に関する書籍)が出版されていますし、第2次世界大戦ではラトビアも戦場と化し、多くの人々が戦争で悲惨な体験をして古リガ市も戦禍により破壊されたのですが、この戦時下に市民の協力の下に動物園の動物を全部安全な場所に避難させて助けたそうです。

日本の戦争末期に多くの動物園の動物がたった運命を思い起こし、2度と動物を不幸な目にあわせたくないものとの想いが心の中に強く込み上げて来るのをおぼえました。

(権藤真慎)

トピックス (61年7月～62年1月)

◆第16回サマースクール開催 (61年7月24日～31日)

夏の恒例の行事であるサマースクール、今年は、果下馬とカリフォルニアアシカについての議義、見学等を行い、336名の小学生が参加しました。



◆ソ連リガ市より贈られたカワウソの愛称決まる



昨年5月にソ連・リガ市より贈られた、ヨーロッパカワウソのペアの愛称を募集したところ2301点の応募があり、その中からオス「ユウ(勇)」くん、メス「コウ(幸)」ちゃんが選ばれました。そして、名前のお通り勇ましく、また幸せになってくれることを祈り、8月24日に命名式を行いました。今は動物科学資料館の新しい住まいで元気に暮しています。

◆動物をはかる会開催 (8月24日)



カワウソの命名式と並行して開催し、キエリボウシインコ、カメ(ホウシャガメ・イシガメ・クサガメ)、ダチョウの卵の3種類の動物の重さ当てクイズを実施しました。入園者の前で実際に計量したところ、インコは580g、カメは3匹で8.3kgになりました。またダチョウの卵はニワトリの卵との比較で36個分でした。

◆中国・天津市よりタンチョウが贈られる

このタンチョウは、11月7日に天津市動物交流訪問団の李貴山団長らに伴われて大阪空港に到着しました。そして10日に贈呈式を行い、李団長から神戸市の笹山助役に無事贈られました。その日から入園者の前で優雅な舞いを披露しています。



◆うさぎ年賀状版画コンクール開催

昭和62年のエトであるうさぎの賀状版画を募集しました。今年
は、4,082点という過去最高の応募の中から、特別賞7点、金賞
30点、銀賞100点を選出し、1月15日に動物科学資料館内の動物
園ホールで表彰式を行いました。(特別賞入賞作品／裏表紙)



◆リスザルをソ連・リガ市へ贈る

昨年5月にヨーロッパカワウソを贈られたお返しとして、リスザル10頭をリガ市へ贈りました。リガ
市へ動物を贈るのは、57年のニホンザル以来2度目のことです。

◆ポニーの「ロクスケ」永眠

20年余りの間、人々に親しまれてきたポニーの「ロクスケ」が、9月8日老衰のため死亡しまし
た。年齢は26歳、人間でいえば80歳の高齢です。生前は、園内で馬車を引いたり、様々な行事に登
場し、子供たちの人気者でした。天国でもきっと子供たちと一緒に元気に遊んでいることでしょう。

◆カバの「茶目子」にお婿さん

昨年9月15日に20年近く連れ添ってきた夫「出目男(2代目)」に先立たれ、一頭寂しく暮らしていた
「茶目子」が3度目の結婚をしました。今回婿入りしたのは姫路セントラルパークからやってきた6歳
のオスで、34歳の茶目子は28歳も上の年上女房ですが、年の差を越えてうまくやってくれることを祈っ
ています。

◆動物園に新しい仲間がやってきた!

10月に、フタユビナマケモノ、ナマケグマ、コモンツパイという3種類の動物たちが仲間入りしまし
た。また、ベニガオザル、コクチョウ、ヒマラヤグマ、ラマ、コモンツパイの赤ちゃんが次々に生まれ、
園内がにぎやかになっています。 (村井秀徳)

◆遊園地大改装

春休みに向けて、遊技物をたくさん新設しています。

◆「うさぎ」の花壇を作る

昭和62年のエトであるうさぎを、園の正面に葉ボタン約850
株で作りました。その前で写真撮影をしている人の姿をよく見
かけます。 (塩田俊夫)



うさぎ年年賀状コンクール特別賞入賞作品



上段(右)より

神戸市長賞
荒田小・1年……………佐藤 洋平さん

神戸市立王子動物園長賞
多井畑小・2年……………右田小百合さん

神戸新聞社賞
高倉台小・5年……………安田 なえさん

サンテレビジョン賞
御影高・1年……………五島 努さん

下段(右)より

神戸市動物愛護協会長賞
豊岡絵画教室……………塩見 雅子さん

神戸市教育委員会賞
東灘区・一般……………西久保由江さん

神戸王子動物園協会賞
神出中・1年……………吉田 恵子さん

◆編集後記◆

今年は、王子動物園にとって新たな出発の年といえます。動物科学資料館の完成、カワウソ、ナマケモノなど珍しい動物の導入など、今までの動物園が、より充実したものになりました。動物を愛するすべての人々が、今まで以上に動物園に愛情を注いでいただけるよう関係者一同願っています。
(編集部)



はばたき 第21号

昭和62年3月20日発行

編集：神戸市立王子動物園
TEL. (078)861-5624

発行：神戸王子動物園協会
TEL. (078)801-5711
神戸市灘区王子町3丁目1

印刷：梶原出版印刷合資会社